

(1) 次の各文中の□部の語について、助動詞はその意味を答えよ。
また、助動詞でないものには×をつけよ。

(2) 各文を現代語訳せよ。

① 死にし子、顔よかりき。

② 心なき身にもあはれは知られけり

③ あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人にみせばや

④ 春立てば消ゆる氷の残りなく君が心は我に解けなむ

⑤ 古き塚はすかれて田となりぬ。

⑥ 堂の物の具を砕けるなりけり。

⑦ やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。

⑧ 女のえ得まじかりけるを、年を経てよばふ。

⑨ 主を見たらば、告げよ。

⑩ 女房にも歌詠ませ給ふ。

夏補習（助動詞特講）①

● p32 助動詞1 「き」「けり」

補足 「けり」が詠嘆になる時について

テキスト掲載問題より

▼助動詞「けり」に気をつけて、傍線部を現代語訳しなさい。

9 住みける所を名にて「竜門の聖」とぞいひける。

10 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける

（脱線）係り結びを含む一節の訳し方

（例） 雨こそ降れ。

（例） 雨や降る。

● p33 助動詞2 「ず」

補足 「ず」の活用表の中で、漢文では登場しない形は。

テキスト掲載問題より

▼助動詞「ず」を適切な形に直して、空欄に入れなさい。

6 誰とこそ知ら^ら_ら。

7 講師は、「思ひかけ^へ _らことなり」といへば、

8 宮仕へしたまふべき際にはあら^ら _らき。

▼助動詞「ず」に気をつけて、傍線部を現代語訳しなさい。

9 法師ばかり、うらやましからぬものはあらじ。

10 秋ならねども、あやしかりけりと見ゆ。

● p34 助動詞3 「つ」「ぬ」

補足 「^にき」「^にけり」「^にたり」の「^に」は？

補足 「強意の用法は、下に推量系の助動詞」とあるが、「推量系の助動詞」をすべて挙げて。

テキスト掲載問題より

▼助動詞「ぬ」に気をつけて、傍線部を現代語訳しなさい。

8 雨のいたく降りしかば、え参らずなりにき。

9 潮満ちぬ。風も吹きぬべし。

10 東へ行きなば、はかなくなりなまし。

補充

「ぬ」「ね」の識別 梓囲みの説明として適当なものを、左の語群からそれぞれ選べ。

- 1 眼に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、
- 2 山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば
- 3 昔の直衣姿こそ忘れぬ。
- 4 具して率ておはしぬ。

a 打消の助動詞 b 完了の助動詞

補充

「て」の識別 梓囲みの説明として適当なものを、左の語群からそれぞれ選べ。

- 1 鬼はや一口に食ひてけり。
- 2 し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむ。

a 完了の助動詞 b 接続助詞

● p35 助動詞4 「たり」「り」

テキスト掲載問題より

▼助動詞「り」に気をつけて、傍線部を現代語訳しなさい。

- 9 血たれども、何とも思へらず。
- 10 卯月ついたち、詠める歌。

(cf.) 大納言、歌を詠まる。

● p36 名作に親しむ 『方丈記』

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし。たましきの都のうちに棟を並べ、鬘を争へる高き賤しき人の住ひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。或は去年焼けて、今年作れり。或は大家ほろびて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変わらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中にわづかにひとりふたりなり。朝に死に夕に生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人いづかたより来りて、いづかたへか去る。また知らず、仮の宿り、誰がためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主と栖と無常を争ふさま、いはばあさがほの露に異ならず。或は露落ちて、花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。或は花しほみて、露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つ事なし。

問 本文中の助動詞「き」「けり」「ず」「つ」「ぬ」「たり」「り」を○で囲み、右横に意味を書きなさい。

夏補習（助動詞特講）②

● p38 助動詞5 「る」「らる」「らるる」

補足 尊敬の現代語訳 「オノニナサル」はOK?

補足 「くれ給ふ」「くれ給ふ」の「れ」・「られは……」

例 春秋の行幸になお、昔思ひ出でられ給ふこともまじりける。

テキスト掲載問題より

▼助動詞「る」「らるる」に気をつけて、傍線部を現代語訳しなさい。

- 7 この女子に教へらるるも、をかし。
- 8 大将、福原にこそ帰られけれ。
- 9 ふるさと限りなく思ひ出でらる。
- 10 胸ふたがりて、物なども見入られず。

補充 「る」「れ」の識別 枠囲みの説明として適当なものを、左の語群からそれぞれ選べ。

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 1 今日 <small>は</small> 都のみ思ひ遣らる。 | 2 み吉野の山 <small>べ</small> に咲ける桜花 |
| 3 秋風 <small>に</small> 吹かれ <small>て</small> 赤し鳥の脚 | 4 大将、福原 <small>に</small> こそ帰られけれ。 |
| 5 抜かむとする <small>に</small> 、おほかた抜かれず。 | |

a 完了の助動詞 b 自発の助動詞 c 可能の助動詞 d 受身の助動詞 e 尊敬の助動詞

● p39 助動詞6 「す」「さす」「さす」

補足 「くせ給ふ」「くせ給ふ」の「せ」・「させは……」

テキスト掲載問題より

▼助動詞「す」「さす」に気をつけて、傍線部を現代語訳しなさい。

- 7 例のごとく、隨身にうたはせ給ふ。
- 8 人をやりつつ求めさすれど、さらになし。
- 9 上も宮も、その歌をば、いと興ぜさせ給ふ。
- 10 妻の姫にあづけて養はす。

補充 次の文の空欄に、助動詞の「る」「らる」「す」「さす」のいずれかを、適当な活用形に直して入れよ。

・上おはすに、御覧じて、いみじう驚からたまふ。(上II天皇)

補充 次の文に訓点を施せ。

・使人取虫置酒中。

● p40 名作に親しむ『枕草子』ものづくし

問 助動詞を○で囲み、右横に意味を記せ。

心ときめきするもの

雀の子飼。兎遊ばする所の前わたる。良き薫物たきてひとり臥したる。唐鏡のすこし暗き

見たる。よき男の車とどめて案内し問はせたる。頭洗ひ化粧じて、香ばしう染みたる衣など着たる。

ことに見る人なき所にも、心の内はなほいとをかし。待つ人などのある夜、雨の音、風の吹き

ゆるがすも、ふとおどろかる。

ありがたきもの

舅にほめらるる婿。また、姑に思はるる嫁の君。毛のよく抜くるしろがねの毛抜。主そしらぬ従者。

めでたきもの

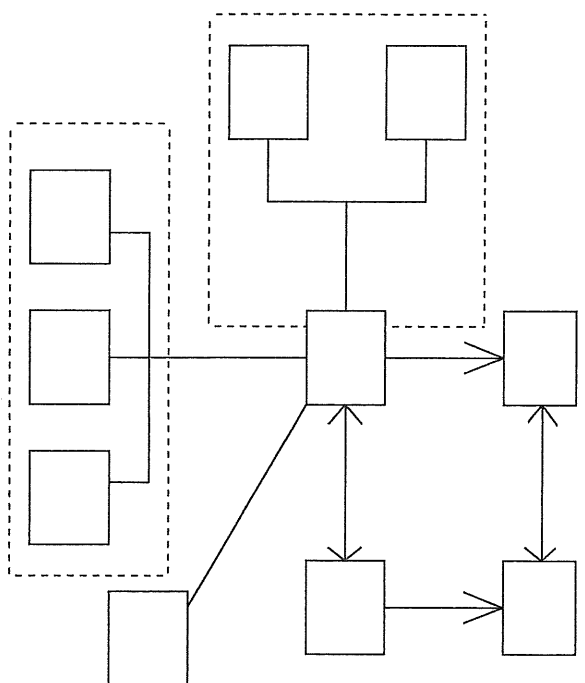
博士の才あるは、いとめでたしと言ふもおろかなり。顔にくげに、いと下臈なれど、やんごとなき

御前に近付き参り、さべきことなど問はせ給ひて、御書の師にてさぶらふは、うらやましくめでたく

こそおぼゆれ。

● p42 助動詞7「む」

補足 推量グループ概観



補足 文中の「む」は仮定か婉曲、文末の「む」はそれ以外(※「む」「べし」の意味は、決めにくいもの有り)

テキスト掲載問題より

▼助動詞「む」に気をつけて、傍線部を現代語訳しなさい。

5 「とくこそ試みさせたまはめ。」

8 双六は、「(自分が)勝たむ」と思ひて打つべからず。

9 ほととぎすいつか来鳴かむ。

10 「これに白からむところ入れて持て来。」

夏補習 (助動詞特講) ③

● p43 助動詞 8 「むず(んず)」「じ」

補足 「むず」は切りすぎ注意。

補足 「よもくじ」の現代語訳は。

テキスト掲載問題より

▼助動詞「むず」に傍線を引き、その活用形を答えなさい。

2 「(私は)人手にかからば自害をせむずれば、」

5 「いかやうにてか、おはしまさむずる。」

▼助動詞「じ」に傍線を引き、その文法的意味を答えなさい。

7 かの矢なりとも、この鎧はよも通らじ。

● p44 助動詞 9 「らむ(らん)」「けむ(けん)」

補足 現在推量か、現在の原因推量かの見分け方

傍線部は事実として確定しており、原因を推量できるので…

眼前に花散るらむ。

傍線部は事実として未確定なので…

冥王星に花散るらむ。

(例)

※疑問の副詞とセットで使われるときは、現在の原因推量のことが多い。

(例) などや悲しき目を見るらむ。

(例) 冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ

補充 「らむ」の識別

u + らむ

e + らむ

それ以外 + らむ

テキスト掲載問題より

▼助動詞「らむ」に傍線を引き、その活用形を答えなさい。

4 さだめて心もとなく思すらむ。

6 つとめては雪ぞつもらむ。

● あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや

● p46 名作に親しむ『更級日記』物語へのあこがれ 助動詞を〇で囲み、右横に意味を記せ。

かくのみ思ひくんじたるを、心もなぐさめむと、心苦しがりて、母、物語などもとめて見せ給ふに、
 げにおのづからなぐさみゆく。紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおぼゆれど、人かたらひ
 などもえせず、たれもいまだ都なれぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼ
 ゆるままに、『この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ給へ』と心のうちに祈る。親の太秦に
 こもり給へるにも、異事なくこのことを申して、出でむままにこの物語見はてむと思へど見えず。
 いとくちをししく思ひ歎かるるに、をば^{断定}なる人の田舎よりのぼりたる所にわたいたれば、「いと
 うつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、かへるに、「何をか奉らむ。
 まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくし給^{伝聞}なる物を奉らむ」とて、源氏の五十余巻、
 櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一袋とり
 入れて、得てかへるここのうれしさぞいみじきや。

はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちにな
 ちふして、ひき出でつつ見るここのち、後の位も何にかはせむ。

● p48 助動詞10「べし」 ● p49 助動詞11「まじ」

補足 「まじ」は「べし」の反対と覚えると楽。

テキスト掲載問題より

▼助動詞「べし」「まじ」に傍線を引き、その文法的意味を答えなさい。

(とは言うものの、本にある通り、『べし』は短文中で意味を決定することが難しい)

- 2 先の世のこと知るべからず。
- 9 家の造りやうは、夏を旨とすべし。
- 深き志は、この海にも劣らざるべし。

1 かぐや姫え止むまじければ、